２０１９年度　古典Ｂ　第10回スクーリング資料

蜻蛉日記（かげろふにつき）　藤原道綱母（みちつなのはは）　泔坏（ゆするつき）の水

知的シゲキ BOOKS より

作者　藤原道綱母

成立年代　平安時代

ジャンル　日記（三巻）

※女性による本格的かな日記の初め。最初の日記は『土佐日記』で男性（紀貫之）が作者だった。

P148 L1　心のどかに暮らす日…一夫多妻制で通い婚だったので、たまにしか夫の訪問がなかったが、この日は来てくれてよかったということ。

L2　はかなきこと言ひ言ひ…つまらないことを言い合って。たまに会うと口げんかしてしまうものなのでしょうか。

L5　出づるになりぬ…出て行ったのは「兼家」

論なし…言うまでもなく

L6　さやうにぞあらむ…そういうことだろう（兼家が道綱に「もう来ない」と言ったのだろう）

人の聞かむもうたて…周囲の人（侍女など）に聞かれるのも面倒で

L7　音もせず…（夫の）訪問が（五～六日ほども）ない。

L9　かくてやむやうもありなむかし…このように止む（終わってしまう）様なこともあるかもしれない

L10　ながむ…物思いにふける　眺める

さながらありけり…（水が）そのまま残っていた

P149 L1　かくまで…こんなに（塵が浮く）なるまで

L3　見えたり。例のごとにてやみにけり…兼家の姿が見えた。いつもの調子でうやむやに終わった→結局兼家が来てくれると妻として強く言えないようである。

紫式部日記　紫式部

作者　紫式部　成立年代　平安時代　ジャンル　日記

学習課題⑪説明文

一、消息文（せうそこぶみ…ショーソコブミ、と発音する）

P150 L1　左衛門（さいもん）（「さえもん」の短縮形）

L2　え知り侍らぬ…え＋打消＝不可能　知ることができない　理解できない　心当たりがなくてわからない

L3　内の上の…天皇が→ここでは一条天皇のこと

L4　才（「ざえ」、と発音する）

L5　才がる…才能をひけらかす

殿上人（てんじょうびと　天皇が日常生活を営む「清涼殿」に上がることを許された人）

L6　ふるさと…ここでは「実家」の意味ですが、「古い都」という意味でも頻出する単語。

L7　さる所…問「さる所」とはどのような所か。※宮中のような公的な場

L9　書（「ふみ」と読み、「文」に同じ。）古典で「ふみ」といえば、①学問　②漢籍　③漢詩　④手紙　のどれか。

ここでは②漢籍　のこと。

消息文に見る他人への評価　清少納言評

清少納言という人こそ、得意顔で偉そうに振る舞っていた人です。あれほど利口ぶって、さかしらに漢字を書き散らしているくせに、間違いは多いし。このように、自分は他人よりも特別優れていると思い込みたい人は必ず見劣りするものだし、将来悪いことが起こるだろうし、風流ぶるものだから、ひどくもの悲しくつまらないときでも、しみじみ感動してみせたりして、そのうえいつも「なにか面白いことはないか」と嗅ぎ回って、自然と誠実でない態度になってゆくのでしょう。そんな不誠実な人間が行き着く先は、どうせろくなもんじゃない。

和泉式部評

和泉式部という人は風情ある手紙のやりとりをしたものです。しかし和泉っちは男にだらしないところがあるにせよ、気楽に手紙をサラッと書いたときに、その方面の才能がある人で、ちょっとした言葉に優美な点も見受けられるようです。彼女が詠んだ歌はとても趣があるものです。

歌に関する知識や理論という点では、真実の歌人という感じではないようですが、口に任せて詠みだした歌に、かならず面白い一節が目にとまる詠みぶりです。それでも、人が詠んだ歌を批判して論じる時には、まあそこまで歌を分かっていないようで、言うなれば「口に歌を詠まされているようだ」と見受けられる作風ですね。こちらが恥じ入ってしまうほどの立派な歌人だなあ、とは思えません。

赤染衛門評

丹波の守殿の正妻のことを、中宮彰子様や藤原道長様の近辺では「匡衡衛門」と言います。特に家柄が良いわけではありませんが、実に風格があって、「私は歌人よ」という風に何かにつけて歌を詠み散らかすことはしないけれど、知っている限りではちょっとした折節の歌でも、それこそこちらが恥じ入ってしまうような詠みぶりです。この方と比べると、ともすればどうしようもない出来そこないの歌を詠みだして、言いようもなく気取った振る舞いをして、自分は凄いんだ、と思っている人は、憎らしくもあり、また一方では気の毒だとも思われることです。

和泉式部日記　夢よりもはかなき世の中

作者　和泉式部　　成立年代　平安時代　　ジャンル　日記

※百人一首では「あらざらむ　このよのほかの　おもひでに　いまひとたびの　あふこともがな」が有名。娘の小式部内侍も「おほえやま　いくののみちの　とほければ　まだふみもみず　あまのはしだて」で有名。

P152 L1　世の中…男女の仲　四月…「うづき」と読む方が望ましい。
L2　築土（ついひじ）…東京の「築地」という地名の成り立ちと同じである。埋め立て地、地面を固めて作った土地。
L3　透垣（すいがい）
L7　名残（なごり）
P153 L2　昔のやうにはえしもあらじ…（あなたも）昔のようにはいられないでしょう（え＋打消＝不可能）
L5　橘の花…その香が「昔のことを思い出させるもの」とされている。
L6　言葉にて…口頭で
L7　かたはらいたくて…きまりが悪くて
L15　ゆめ人に言ふな…決して人に言うな（ゆめ＋打消＝決して～ない）

一、一四五首の和歌が織り交ぜられていることが特徴である。
二、**読みに注意！**　故宮・為尊親王（ためたかしんのう）、小舎人童（こどねりわらわ）、帥の宮（そちのみや）
四、「人はことに目もとどめぬを」…他の人は特にそれに目を留めなかったが（私は、それをしみじみと眺めていた）
八、『古今和歌集』「五月（さつき）待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」
※橘も、P153の二首の和歌に出てくる「ほととぎす」も五月（仲夏）を表すもの。俳句でいうと「夏」の季語になる。